

クロッチ作品を創るラッキーワイドの造形作家たち。

10

# 横内利彰

よこうち としあき

「神様だな……」  
先輩方の仕事ぶりを見てそう思う。

「立体を仕事にしたい」と、グラフィックデザインの世界から転向してきた入社2年目の横内利彰さん。

パソコンの前に座り、パンフレットなどの制作をしていた前職と、「造形」の仕事とのあまりの違いに当惑した入社当時。まず、「体を動かして作ることに苦戦したという。さらに、ここでは何人ものスタッフがチームを組み、ひとつの作品を作るのが多いため、その「チームプレイ」に慣れるのが大変だったそうだ。

幼いころはアニメの塗り絵に夢中になり、そのうち独自のキャラクターを描くようになる。長じては、自分の作品を立体にしておしてみたくなり、初めて作ったフィギュアを先輩の誕生日に贈ったら、それが好評で「店に



置かないか」と声がかかるようになった。そんなキャラクター一筋の人生を歩んできた横内さんは、デザイナーを辞めてしばらく作家活動に専念していた。造形作家のタクジ(TOG)氏が創ったランジラスという怪物の人形に大きな影響を受けた横内さん。ランジラスは見る方向によって顔が違う。それは平面では表現できない。「やはり立体はすごい！」と感動したのだ。自分も「角度によって見え方が違う立体を作りたい」と思い、実在しないオリジナルの生き物を創りあげる。生み出したキャラクターはすでに何十人にもなる。ラッキーワイドでの仕事と平行して今後も作家活動を続けていきたいそうだ。

今回、会社で手がけている立体物と、映像やプロジェクトヨ

ンマッピングの組み合わせができたらしらと思いついた。映像の仕事をしている友人に話をもちかけ、木下さん制作のクロッチの大きな絵と映像のコラボレーションが実現した。見た目の「怖さ」と中身のやさしさのギャップがオイラの魅力だといってくれる横内さん、いつかオイラのフィギュアも作ってくれるかな。

仕事で不安を感じた時には、その気持ちを先輩方に正直に伝えるという横内さん。「いつも震えていますけどマイペースです」と気負いはない。だから、自分を動物に例えるなら、チワワかなマケモノだと語る。同期入社7名のうち、横内さん以外はすべて女性。「女性のほうが強いなと思います」と涼しげに語る姿に、「柔能く剛を制す」、この言葉がよぎったよ。

クロッチ作品を創る映像作家。

11

# 木村郁也

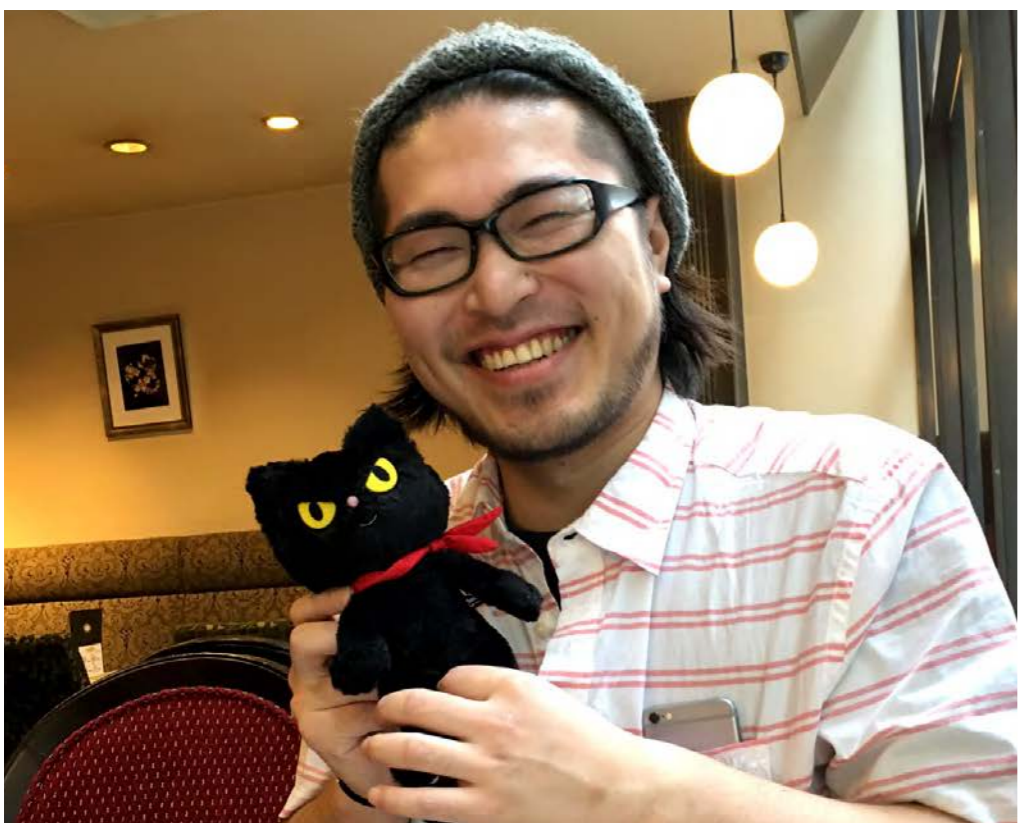
きむら ふみや

会場を夜回りするクロッチ。映像ディレクターが仕掛ける遊び。

このたびの展覧会、20時のギャラリー閉場後にもちよいと楽しめるしがある。「夜、動き出すクロッチ」を手がけるのは、フリーで活躍する、映像ディレクターでCGクリエイターの木村郁也さん。先に紹介した横内さんの友人だ。

「遊び心が見どころ」と語る木村さんの作品。夜、通りを歩いている人たちに、「あれっ？」と気づいて楽しんでもらいたいという。ギャラリー内に展示された、ある作品をスクリーンにみため、映像を当てていくプロジェクトクションマッピング。見た目の怖さとは対照的な、オイラの性格や抱えている背景が魅力だと語ってくれた。

イラストレーターから映像の仕事に転向した木村さんは、実



は人気VJ(visual jockey)としての顔も持っている。VJこと

ヴィジュアルジョッキーとは、DJの映像ヴァージョンのこと。VJとDJとの相乗効果で会場は最高に盛り上がる。渋谷のクラブや、幕張メッセでのミュージックフェスティバル、サマーソニックなどの大きなステージで何万人もの聴衆を前にVJとして活躍する木村さん。「ライブワークとして取り組んできたVJの仕事が、最近、軌道にのってきた」とうれしそう。大好きなVJの仕事と、映像やCGの仕事を手を交わしながら取り組むうちに双方のレベルがあがってきたそう。

木村さんは自分の映像作品を残すことにはあまり興味がない。「一回ぼつくりのショーの仕事が好き」と力強く語る。そのたった一度限りのステージに全身全

霊をこめるのだ。何ヶ月も前から映像の準備をするのだが、本

番1時間前の打ち合わせで、「こんなふうにはやってほしい」なんて突然言われることも。でもそれさえも「ドキドキするぶん楽しいですね」だって。さすが！「全体のショーとしてバッチリいものを出した時はビールがうまいですね」と微笑んだ。

この夏に父親になった木村さんは、もともと子どもが大好き。高校時代には、美術の道に進むか、保父さんになるか真剣に迷ったそう。

さて、自分を動物に例えるって？「自分ではわからない」。奥様いわく「大型犬」「吠えずにずっと寝ている年をとった犬」だそう。今後はVJとして、「より大きなステージで、海外でやってみたい！」と語る木村さん。まもなく仕事で上海に飛ぶ。

